⑺　近代登山にみる歴史的風致

ア　はじめに

㈠　山岳信仰と登山

日本では古来、山岳は信仰の対象とされてきました。山岳は神社のご神体とされたり、僧侶や行者の修行の場でした。

貞観９年（867）には里山辺の須々岐水の神と安曇地区の梓水（あずさがわ）の神が、従五位下に叙されたことが『日本三代実録』に見えています。須々岐水の神は美ケ原と鉢伏山（はちぶせやま）を水源とする薄川を、梓水の神は穂高連峰や乗鞍岳を水源とする梓川を神格化したものと考えられます。

大宮熱田神社本殿

梓水の神を祀る、梓川地区の大宮熱田神社は、若宮とともにその本殿が重要文化財に指定されています。また、波田地区には江戸時代に信濃日光と呼ばれ賑わった山林寺院、若澤寺（にゃくたくじ）跡があり、寺は廃仏毀釈により廃寺となりましたが、境内にあった室町時代建立の田村堂は今に残り、重要文化財に指定されています。

一方、須々岐水神社の御神体とみなされる筑摩山地には、美ケ原を始めとする標高 2,000m前後のなだらかな台地が４kmあまりにわたり広がります。美ケ原は深田久弥の日本百名山にも選ばれたれっきとした山で、溶岩が固まってできた安山岩は板状節理と呼ばれる薄い板状に割れる性質を持ち、これらは屋根材などに使用されました。新しそうに思われる美ケ原の呼称は、すでに江戸時代中期の松本藩の地誌である『信府統記』に見えます。

美ヶ原の三角点付近

美ケ原の南に位置する鉢伏山の麓には本尊十一面観音（重要文化財）や鉢伏権現（はちぶせごんげん）の木像（県宝）を始め、平安時代後期の仏像を数多く伝える牛伏寺が古代以来の法灯を伝えています。

江戸時代後期には、それまで神聖視され登ることのなかった山に登る宗教者が現れます。御嶽（おんたけ）の軽精進登山（けいしょうじんとざん）（厳しい修行を必要とせず、水行などのみで登山を行うこと）を進めた覚明（かくめい）などの修験者がそれに当たります。また、槍ヶ岳開山で知られる念仏聖（ねんぶつひじり）、播隆上人（ばんりゅうしょうにん）もその一人です。播隆は、飛騨の笠ヶ岳再興登山のとき、東に見える高く険しい峰に御来迎を見て、槍ヶ岳開山へと向かいました。文政９年（1826）８月、藩主・水野氏の菩提寺である玄向寺（げんこうじ）を訪ね、槍ヶ岳山頂を切

り開き「善の綱」と呼ばれる鉄鎖を取り付け、心あるものの登山を可能にしています。乗鞍岳も文政２年（1819）に、明覚法師と永昌行者という御嶽行者によって開かれ、庶民が登山するようになります。その目的は、古くは病気の治癒が中心でしたが、明治以降は養蚕の順調な生産（当たり）を祈願することも多く見られました。行者による代参の勧めは、山麓のムラの経済を潤すことにもつながり、徐々に信仰を離れた物見遊山へと変化していきます。

⑷ 近代登山の歴史

明治の中頃からは信仰を離れ、山に登ることに意味を見出した登山が始まります。これが近代登山の始まりです。

明治 10 年（1877）にイギリス人のウィリアム・ガウランドが、外国人としては最初に槍ヶ岳に登りました。後にガウランドはその著書の中で「the Japanese alps」として北アルプスの山々を紹介しており「日本アルプス」の名称はガウランドによって初めて唱えられたと言われています。

近代登山の発展に功績のあった松本にゆかりの深い人物は、“日本アルプスの父”あるいは“近代登山の父”の異名を持つ、イギリス人宣教師ウォルター・ウェストンです。その著書『日本アルプスの登山と探検』により、日本アルプスの名を世界に広めた功績は大きく評価されています。明治 24 年（1891）にウェストンが上條嘉門次らの案内人を雇って初めて上高地を訪れたときのルートは、島々（しましま）から徳本峠を越えて明神に至る道です。この時は槍ヶ岳の登頂を果たせず、ウェストンは翌

アルピコ交通上高地線と徳本峠越えの登山道

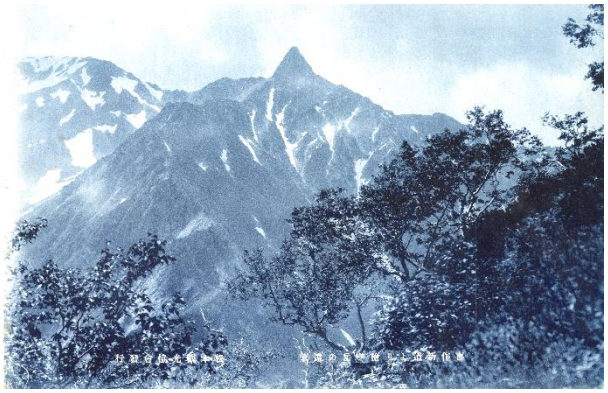
年も上高地を訪れることとなりました。

明治 27 年（1894）に志賀重昂（しげたか）が著した『日本風景論』は、槍ヶ岳を始め日本の代表的な山々をあげ、そこへの道程を細かく紹介し、さらに「登山の準備」「登山中の注意」などの項を設けて、技術を含めた登山のための実践ガイドブックの役割を果たしています。明治 39 年（1906）には市内の高美書店から『槍ヶ嶽乃美観（やりがたけのびかん）』が出版され、近代登山が日本各地の富裕層に広がっていきます。これらの明治期の登山案内書は、里の風景を見慣れた人々の景観意識を一変させ、若者たちを大自然と直に向き合うことのできる登山に導いています。以来、大自然との出会いは登山の最大の魅力として今も変わっていません。

同じ頃、国の参謀本部陸地測量部の測量技師たちが地形図を作成するため、北アルプスの頂上を目指していました。ウェストンの『日本アルプスの登山と探検』にも「政府の役人が穂高岳の最初の登山に成功した」ことが記されています。彼らを山に導いたのも、嘉門次ら山の案内人です。彼らの努力により、上高地周辺の５万分の１の地形図は大正２年（1913）に出版されました。登山道や山小屋も徐々に整備され、上高地線（当時の筑摩（つかま）電気鉄道）が島々まで開通した大正 11 年（1922）には、島々の登山口に登山案内人組合が結成されています。

また、明治 38 年（1905）に、ウェストンの指導により小島烏水（こじまうすい）らが山岳会を設立し、スポーツ登山が一般にまで浸透していきます。高等学校や大学等の学校に山岳部ができ、日本アルプスの主峰への初登頂が競われました。大正２年（1913）には第一高等学校に山岳会が設立され、夏期登山旅行で訪れた上高地でウェストンに出会っています。

大正８年（1919）９月に開校した松本高等学校でも、第１回目の校友会総会で山岳部が設けられ、バリエーション・ルートと呼ばれる初登攀（とうはん）の岩壁に挑むようになります。松高山岳部は、前穂高岳の奥又白をベース・キャンプとして、東壁の登攀に執念を燃やし、松高生やそのＯＢが初登攀したルートは、松高ルンゼ、松高カミンなど松高の名を冠して呼ばれています。



絵はがき「喜作新道より槍ヶ岳の遠望」（昭和初期）

大正 13 年（1924）には道路の整備も着手され、難工事の末、釜トンネルが開通したのは昭和８年（1933）のことです。道路が整備されると大正池までバスの運行が始まり、帝国ホテルを始め多くの宿泊施設ができ、２年後には河童橋までバスが通るようになります。こうして年間５万人もの入山者を迎えるようになりました。

上高地は昭和３年（1928）に史蹟名勝天然紀念物保存法により名勝天然記念物に指定され、文化財としての保護が図られるようになり、昭和 27 年（1952）には文化財保護法により特別名勝及び特別天然記念物に指定されました。

イ　歴史的風致を形成する建造物

㈠ 山小屋

島々から上高地に至る登山道沿いには、近代登山初期に建てられた徳本峠小屋、嘉門次小屋が残されており、現在も山小屋として用いられています。徳本峠小屋休憩所及び嘉門次小屋囲炉裏の間は国の登録有形文化財に登録されています。これらの山小屋は、近代登山に先行する狩猟、杣（そま）、山岳信仰のための建物に酷似し、山の中で不可欠な火を焚くための囲炉裏を備えたものもあり、山岳建築において広く見られる姿を残しています。

ａ 嘉門次小屋

上高地の梓川を遡上した明神池畔に位置し、日本近代登山の発展において重要な足跡を残した上條嘉門次に由来しています。

嘉門次小屋（手前が囲炉裏の間）

嘉門次小屋は、嘉門次から代々受け継がれてきました。山小屋としての経営は、大正14年（1925）頃から始めたと言います。現在の建物は、利用者の増加などに合わせて段階的な増築を経てつくられたものであり、最も古い部分である囲炉裏の間は登録有形文化財です。

囲炉裏の間は南北に長い配置の嘉門次小屋の北端に位置し、木造平屋建て、梁間２間４尺×桁行３間の規模の建物です。東側に入口があり、内部は入口に面して土間があります。その奥に板敷の床が設けられており、中央には大きな炉が設けられています。壁は板壁で、屋根は切妻形式、石置きの板葺です。

ｂ 徳本峠小屋

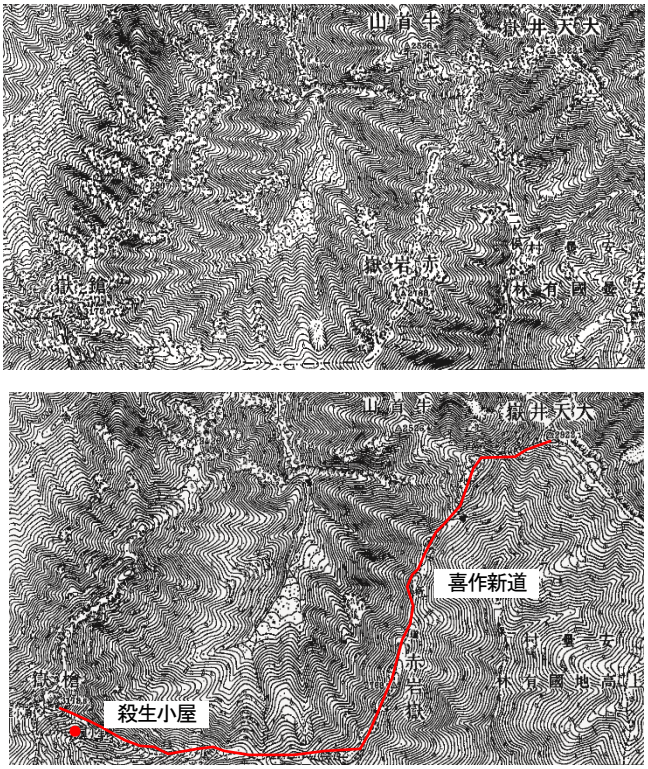
徳本峠小屋は、松本盆地から上高地に至る、登山道の最高点に当たる徳本峠に建つ山小屋です。大正 12 年（1923）に上高地温泉ホテルが徳本峠の頂点に借地をして開設したもので、上高地とその周辺の山小屋の中でも早期のものです。平成21年（2009）から22 年（2010）に大がかりな改築が行われましたが、当初の建物の範囲は保存され、徳本峠小屋休憩所として登録有形文化財に登録され、活用されています。

徳本峠小屋

木造平屋建てで内部は二段ベッドのように３層となっており、より多くの登山者が泊まることができるよう工夫されています。桁行 5.4m、梁間 5.1m、屋根は切妻造の石置板葺です。内部は板敷で一部を土間としています。調査の結果、当初はＬ字型に土間が通り、板敷の床には炉が設けられていたと推定されています。

(イ) 登山道

ウォルター・ウェストンが登山した際、島々から徳本峠を越えて上高地に入っていますが、この道を始めとして近代登山の初期の登山道は、猟師・釣師や樵（きこり）、修験者や登拝者などが奥山へ通った狩猟・漁労・採集や信仰を目的とした近世以前からの道でした。明治時代の終わり頃から大正時代にかけて、登山者の増加に伴い山小屋や登山道が整備されました。

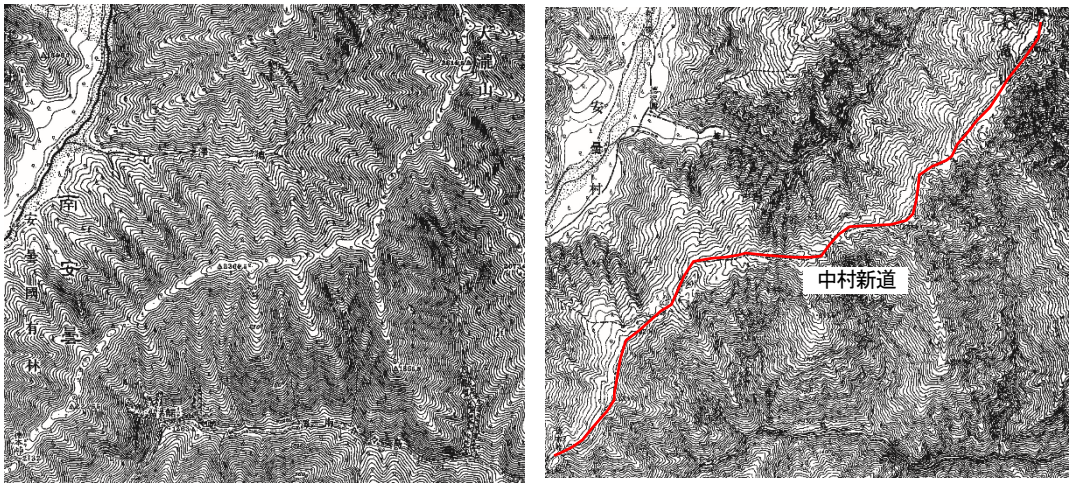


上は大正４年、下は昭和７年の国土地理院発行の地形図。昭和７年の地形図には喜作新道、殺生小屋が掲載されている）

大天井（おてんしょうだけ）岳から西滝を経て、東鎌尾根から槍ヶ岳へ至るルートである「喜作新道」は、そうした登山道の一つです。この新道は、以前からあった猟師たちが通る稜線付近の道筋を拡幅・整備したものでした。その開削作業を担ったのが、猟師であり、山岳ガイドも務めた小林喜作（きさく）でした。小林は明治時代末期から登山者の案内や山小屋の開設に協力しており、大正９年（1920）、小林は中房温泉の経営者である百瀬亥三松・彦一郎親子の出資のもと、喜作新道の開削工事を一応完了させ、翌大正10 年（1921）に本格的に完成させました。そして同年、牧の大工らとともに殺生小屋（現殺生ヒュッテ）を新道の終点付近に当たる槍ヶ岳直下に建設し、大正 11 年（1922）に小屋を開業させました。新道開削や営業小屋新設の工事作業を喜作が中心的に担ったことで、後に自身の名が登山道に冠されることになりました。この新道の完成によって燕岳から槍ヶ岳までの縦走コースが短縮され、登山工程が少なくなり、登山者の大きな助けとなりました。

その後も上高地周辺の山域には、旧来の登山道とは別に新しい登山道が拓かれるようになっていきました。例えば徳本峠から大滝山へ至る登山道「中村新道」は、昭和 16 年（1941）頃に松本市出身の中村喜代三郎（きよさぶろう）によって拓かれた山小屋管理用ルートがもとになっています。また、上宝村神坂蒲田温泉（現岐阜県高山市奥飛騨温泉郷神坂）出身の今田重太郎（しげたろう）が昭和 26 年（1951）に完成させた「重太郎新道」は、岳沢（だけさわ）小屋から前穂高岳までの直登ルートです。

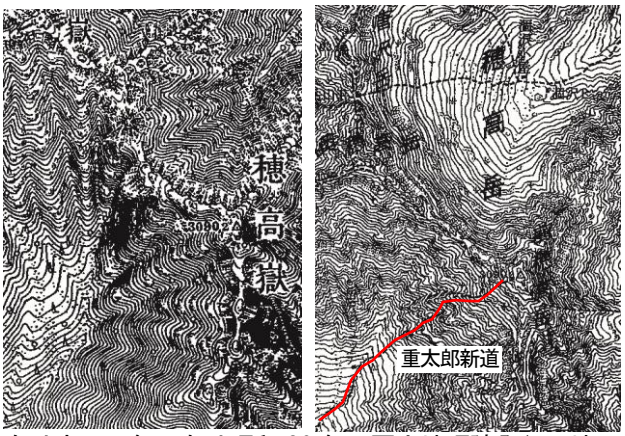
新しく整備されたこうした登山道は、近代登山者が山頂へ登るために拓かれた登頂ルートや縦走ルートであったり、近代登山者向けの営業小屋への短縮ルートとして拓かれた道や、荷上げ・荷継ぎ用のルートとして拓かれた道であったりしました。こうした登山道の開発は、現在の上高地周辺山域における登山ルートのバリエーシ



左は大正４年、右は昭和 36 年の国土地理院発行の地形図。昭和 36 年の地形図には中村新道が掲載されている）

ョンの豊富さにつながり、槍・穂高連峰周辺の山々を登山愛好者に人気のエリアへと押し上げたと同時に、登山の安全と利便さに大いに寄与し、国内の近代登山をいっそう振興させる一つの要因となりました。

明治時代の終わり頃から国の参謀本部陸地測量部による測量が行われ、大正２年（1913）に最初の５万分の１の地形図が発行されています。昭和６年（1931）発行の地形図には、既に喜作新道が記されており、その後も地形図が修正されるごとに、新しい登山道が順次掲載されています。



左は大正４年、右は昭和 36 年の国土地理院発行の地形図。昭和 36 年の地形図には重太郎新道が掲載されている）

ウ　活動

㈠ ウェストン祭

毎年６月の第一日曜日に、日本山岳会信濃支部により、ウェストンのレリーフ（ウェストン碑）の前で、ウェストン祭が行われています。

昭和 12 年（1937）に、ウェストンの功績を讃えて、日本山岳会がレリーフを設置しました。第二次世界大戦中の昭

ウェストンのレリーフ（左：戦前　右：現在）

和 17 年（1942）に、敵国（イギリス）の宣教師であったことから、レリーフが撤去されますが、昭和 22 年（1947）には復旧され、この復旧を記念してウェストン祭が始まりました。現在のレリーフは昭和 40 年（1965）に改作されたものです。

ウェストン祭の前日は、ウェストンが歩いた島々から徳本峠越えのコースの記念山行（さんこう）が行われ、地元小学生や登山愛好家などが参加し、10 時間をかけて往時の登山道を上高地まで歩きます。ウェストン祭では、レリーフ前で碑前祭が行われ、式典に続き山の歌を歌い、著名な登山家を招いての講演会が恒例となっています。

徳本峠越えの記念山行

ウェストン祭での献花

(イ) 登山道や山岳環境の保全活動

全国の国立公園などでは、昭和 30 年代中頃から観光客によるゴミのポイ捨て問題が深刻化し始め、団体・事業者や行政機関が協力して美化清掃活動が開始されました。その先駆けとなったのが上高地です。

「上高地を美しくする会」は、昭和 38 年（1963）６月に会員数 45 名で発足し、年 10 回の一斉清掃を始め、啓発ポスターの作成、山岳清掃パトロールなど、精力的に活動を行いました。昭和 41 年（1966）には「上高地地区運営協議会」が設置され、山岳部を含めた清掃活動やゴミ籠の設置、美化袋配布、美化キャンペーンなどの実施とともに、公衆便所の清掃や汲取り、公園施設の整備・補修などを行ってきました。

上高地を美しくする会の清掃活動
（昭和 50 年代頃）

昭和 49 年（1974）には「上高地を美しくする会」と「上高地地区運営協議会」が合併し、活動は更に活発になりました。昭和 54 年（1979）に、財団法人自然公園美化管理財団（現一般財団法人自

然公園財団）が設立され、同年７月には上高地支部が事業を開始し、翌年には「上高地を美しくする会」に入会しています。

現在も定期的に活動が行われており、清掃活動や園路の環境整備の他、近年は上高地の園路周辺に出没するサルなどの野生動物の追払い等も行っています。

上高地を美しくする会の活動

美ケ原地域においては、平成 16 年（2004）に美ケ原自然環境保全協議会が関係する団体、行政により設立され、平成 18 年（2006）から在来植生再生のためのササ刈りや電気柵の設置によるニホンジカの食害対策など自然環境の保全活動が行われてきました。

また、上高地、美ケ原地域ともにパークボランティアが登録され、ガイドウォークや美化清掃などそれぞれが得意とする分野で活動を行い山岳環境の保全に努めています。

登山道については、山小屋関係者によって定期的な整備が行われています。かつては山小屋への荷揚げのためにも登山道を維持する必要がありましたが、ヘリコプターによる物資運搬が可能となって以降は、登山者の安全確保のための登山道の整備が、山小屋関係者によって行われています。登山道は一般的な歩道や園路と異なり、管理者があいまいなことから行政による整備が行いにくく、山小屋関係者やボランティアの活動に大きく依存しています。

また、遭難事故が発生した際は山小屋関係者が遭難者の救助等に当たるなど、山岳環境の保全や登山者の安全確保に努めています。

こうした様々な人々の活動により、美ケ原高原の台上や河童橋周辺で散策を楽しむ観光客や、槍・穂高連峰への登山者が大自然を安全に満喫する環境が維持されています。

エ　まとめ

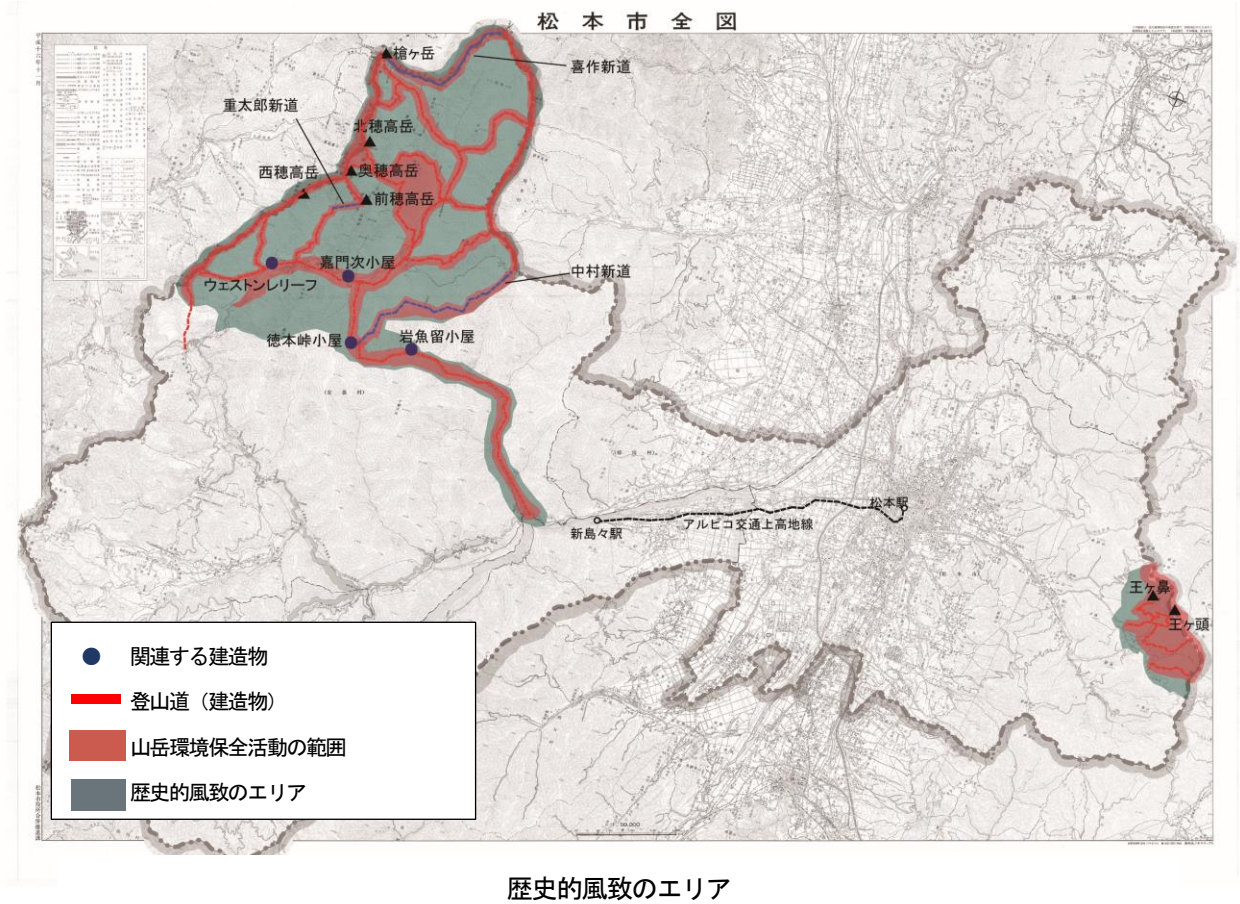
日本の岳人たちが憧れてやまない槍、穂高連峰を始めとする 3,000m級の峰々が連なる北アルプスとなだらかな山容を見せる筑摩山地は、松本盆地を取り囲んでいます。江戸時代の狂歌師・鹿津部真顔（しかつべのまがお）は、冬の松本を「立て廻す　高嶺は雪の　銀屏風　中に墨絵の　松本の里」と詠んでいます。先人たちの山に対する思いは、様々な恵みを与えてくれる山への崇敬から、山に挑み、山を愛し、大自然との絆を深める形に変わって

槍ヶ岳登山風景

きました。

春から秋の登山シーズンには松本駅周辺で大きなザックを背負う登山者が見られ、それらの登山者が利用するアルピコ鉄道上高地線、登山道、山小屋は人々で賑わい、登山道の脇では色とりどりのテントが並んでいます。

近代登山の歩みを今に伝える山小屋や登山道及びその周辺の山岳環境と安全は、様々な主体の人々の活動により保たれ、雄大な山岳景観と相まって歴史的風致を形成しています。



歴史的風致のエリア